

次期演劇芸術監督の選考とその考え方

平成 20 年 7 月 17 日
財団法人 新国立劇場運営財団

新国立劇場は、オペラ、バレエ、現代舞踊、演劇という現代舞台芸術のための唯一の国立劇場として 11 年前に開場した。この間、全ての関係者のなみなみならぬ努力によって、多くのすぐれた作品を創造し続け、内外からの高い評価を得ている。

劇場では、当初から日本においてまだ定着していない芸術監督制度（オペラ、舞踊、演劇の 3 人）を取り入れ新国立劇場が出発した。

演劇部門も、過去 11 シーズンにおいて多くのすばらしい作品を創ることができたのも、現監督を含む歴代 4 人の芸術監督をはじめかかわった芸術家の皆様のご努力の結果と認識している。

（演劇芸術監督の業務内容）

現在、新国立劇場演劇部門の芸術監督は、芸術上の最高責任者として主として次の様な役割をもつ。

- シーズン演目作品（8～9 作品）のプラン作成、および交渉
- メインスタッフ・主演俳優決定プロセスへの参加
- 新作戯曲発注における劇作家とのテーマなどの話し合い
- すべての作品の監修、制作進行チェックならびに自らの演出作品の演出
- 理事会・評議員会および財団内部の会議への出席

その他、広報取材や演目発表記者会見などである。

もとより、芸術監督は任期のある非常勤の職であり、常時劇場に勤務する必要はないが、上記の基本的な方針を定めるとともに、常に進行する制作現場と随時連絡を取りながら劇場の公演に直接間接にかかわっていただく必要がある。

（演劇芸術監督の任期と現監督）

芸術監督の任期は 3 年と定められており、その前の 2 年間は、次期芸術監督予定者として、劇場内では参与として諸準備にあたり、あわせて 5 年間の契約となる。したがって、現監督は、すでに 3 年間本劇場にかかわっていただいております。さらに 2 シーズンを監督として継続していただくことになっている。すべての芸術監督について任期満了の 2 年前には、次期監督予定者（芸術参与）を選び、3 年目以降の準備にあたるのが定められており、今回すべての監督について選考の時期を迎えた（舞踊部門は 4 期目に入るためできるだけ早期に後任をとる現監督のご意向があった）。

現鶴山監督が優れた演出家であることは疑いのないことであるが、劇場としては監督としての仕事をお願いしているという立場にある。

就任最初の今シーズンは演劇関係では 2 作品のご自身の演出作品があったが、その他に他の演劇団体での演出家としての仕事が多忙を極め、必要なコミュニケーションをとることができなかったのは事実である。そのために制作上の支障がしばしば生じ、これ以上再任をお願いするとさらに今から 5 年間お願いすることになり、制作現場をかかえる劇場としては難しいと判断した。

(選考過程)

次期芸術監督の選任については、まず、オペラ、舞踊、演劇の分野毎の選考委員会において審議される。このメンバーは理事長によって指名された理事又は評議員、10名以内で構成される。ここでの審議の結果は、直近の理事会に諮り、その議決を経て、理事長が次期芸術監督を任命することになっている。

今回の演劇部門監督の選考の過程を申し上げれば、本年3月には、ご本人に担当理事が会って後任を検討している旨お伝えしたところ、それに対し監督は「分かりました」と回答された。そのことを前提として新国立劇場としては次期監督の選考に入ったものである。人事の一環であり事前に本人から承諾をうることは必要条件ではないが、念のためにお伝えしたものである。

選考委員会や理事会での議論の内容は人事に関するものであり公表できない。その理由は、席上多くの個人名やその資質、評価などが話し合われており、自由闊達なご意見をいただくために非開示を前提としているからである。これらの討議に参加するすべての方々には守秘義務があると考えます。

選考の過程は、まず、5月に選考委員会を開催した。そこでは、次期監督について様々な意見があったが、結果として後任を選ぶならば宮田慶子氏にお願いするということで一致した。また、6月の理事会では、一部の理事から鶴山監督の継続を主張する意見があったが、大勢は選考委員会の決定を尊重し、宮田氏とすべきとのことであった。その結果、現監督に状況を説明するなどフォローした上で、最終的には理事長に一任する旨の決定がなされた。

(理事会後の動き)

その後、まず、鶴山芸術監督に2回にわたり経緯について十分な説明をしたところ「決定には従う」とのことであった。劇場としては更に慎重に検討を加えた結果、原案通りが最良と考えた。それを前提に選考委員の理事、評議員、当日出席の理事全員の皆様に連絡をし、一部の方を除き、ご理解をいただき、理事長に一任するという最終決定についての再確認を得た。その上で、演劇部門の次期芸術監督については、選考委員会の審議の結果を原案通り決定し、6月30日に新聞等に発表したところである。

(今後の対応)

鶴山監督は、任期を2年残しており、監督ご自身も今後は必要なコミュニケーションについて留意し、新国立劇場演劇部門での仕事を充実するとのお話であり、劇場としてもこれまで以上に監督を支えていく予定であり、良好な関係を保っている。また、9月に参与に就任する宮田慶子氏は、次期芸術監督として今回の決定に関係したすべての人々が推挙しており、その活躍を信じている。

今回の演劇人有志、日本劇作家協会会員の皆様からの声明は真摯に受け止め、私も一同は、わが国唯一の現代舞台芸術のための国立劇場として、全力で精進してまいりたいと考えている。開場以来お力添えをいただいた方々に感謝するとともに、今後とも、ご理解ご支援をお願いしたい。

(新国立劇場運営の透明性について)

新国立劇場運営財団では、芸術・文化団体、芸術家、言論界、教育者、経済界等の幅広い分野から、各界を代表する高い識見を有する方々に、理事、評議員にご就任いただいている。重要な議題については、詳細なる資料を上程の上で、これら理事・評議員により、真剣かつ闊達なる議論・審議を行い、国立の劇場として国民の皆様への負託に応えられる様な、透明性の高い運営を行っている。また、理事会・評議員会の議決・報告案件については、従来より、国民の皆様への説明責任を十分に果たすとの方針のもと、会議後、遅滞無くマスコミ各社の方々に対してブリーフィングを行い、劇場運営全般についての理解促進に努めている。

一部の報道に、官僚主義、お役所的、秘密主義との指摘があるが、劇場の運営や重要事項の決定プロセスは上記の通り、高い透明性が担保されている実態とは全く乖離したものであることを申し添えたい。